

「一日暮らし」という言葉がある。「その日暮らし」とは違う。その日暮らしは、その日の収入で、その日をやっとならざることである。

一日暮らしとは、人間の一生、どんな辛いことがあっても、今日一日の辛抱だと思えば耐えられるし、逆にうれしいことがあっても今日一日と思えば、それにふけることもない。誰でも、今日一日、目の前のことであれば頑張られる。今日一日、一所懸命やればよいということである。こんな話がある。

一日は、千年万年の初めであり、その初めの一日をよく暮らすようにしていると、その日は充実したものとなり、それは一生をよく暮らすことにつながる。ところが、人間というものは、とかく翌日のことを考えて、ああでもないこうでもないと、まだ先のことについて取り越し苦労をして、一日をむだに過ごしてしまい、その日のことを怠りがちになる。明日もあるから今日はこれでいいだろう、という毎日が続いていってしまうと、今日の一日という意識もなくなってしまい、ついあてもない先のことを頼みとして、その日の自分自身の緊張感がなくなってしまう。

明日やればよいと言っても、その明日があるかどうかは誰にもわからない。人の命は、はかないものだからこそ、今日一日の生活はどうなってもいいということではなく、今日の一日を精一杯つとめ励むべきなのだ。

どんなにつらいことでも、一日のことだと思えば耐えられるし、楽しみだって一日のことだと思えばそれに溺れることもない。おろか者が好き勝手なことをして親不孝をするのも、人生は長いからそのうち孝行すればいいなどと考え、つい甘え心を起こしてしまうからだ。

どんなことでも、今日一日が自分の生涯だという気持ちで過ごせば、無意味な時間を過ごすことなく、充実した一日を過ごすことができる。一日一日と思って一生懸命に生きれば、百年でも千年でも充実して過ごすことができる。これから先、長い一生のことだと思えば、荷が重くなってしまって大変になる。

一生は長いものだと思うけれども、これから先のことやら明日のことやら、一年、二年、また百年、千年先のことやら、わかる人はいない。死ぬまでが一生であると思って長く生きることができるような気持ちになっていると、一生という時の長さについてのせられてしまって、だまされやすくなる。

人生の中で一番大切なことは、今日只今の自分の心なのだ。それをおろそかにしては、翌日などというものはない。今日をきちんと一生懸命につとめるように心がけなければ、明日という日も墮落した日になってしまう。今日一日をしっかりとつとめ、明日もまたそのような一日がくるようにしなければならない。

先のことを考えてみることは、世の中すべての人、誰にでもあることだ。しかし、今ここにある、この一刻の、この今を、どう生きるか、どう暮らすかを考えている人は少ない。

これは、長野県飯山市教育委員会発行の『正受老人物語』に載っているものである。正受老人とは高僧であり、真田幸村の兄、真田信之の子どもであると言われている。「一日暮らし」とは、正受老人の教えである。正受老人いわく、「大事と申すは今日只今のこと」である。